

## 著者

**Jonathan Abrahams** WHO 健康危機対応プログラム（ジュネーブ、スイス連邦）

**茅野龍馬** WHO 健康開発総合研究センター（WHO 神戸センター）（神戸）

**Mike Clarke** クイーンズ大学公衆衛生学センター（ベルファスト、グレートブリテン及び北アイルランド連合王国（英国）、エビデンスエイド（ロンドン、英国）

**Emily Y.Y. Chan** 香港中文大学医学部オックスフォード大学協力センター、GX Foundation（香港、中国特別行政区）

**Virginia Murray** 英国公衆衛生庁（ロンドン、英国）

### 1.1.1 本ガイダンスの背景

世界と世界で暮らす人々は、あらゆる種類の危機や災害がもたらす課題に直面しており、その数は増加の一途をたどっている。災害による苦痛を軽減し、命を救い、付随する社会、経済、環境、文化への影響を最小限にするためには、十分な情報に基づいて意志決定をし、戦略を策定して行動を起こし、効果的かつ効率的に健康上のリスクや影響を軽減できる社会を作る事が肝要である。そのためには、災害・健康危機管理 (Health EDRM) に関与する政策立案者、実務者、コミュニティ関係者が、適切なエビデンスを入手、理解、利用できる体制を整えておかななくてはならない。ここで言うエビデンスとは、厳密な研究手法の下に実践され、正確に報告された信頼できる研究から得たものでなくてはならない。また、一つの研究から得られたエビデンスから次の研究課題が示唆され、更なる研究が必要になる事もあるだろう。そのため災害・健康危機管理の意志決定者および実務者は、研究の創出、および学术界との効果的な協力関係の構築に関与することが求められる。

本書は国籍を超えたさまざまな専門分野の人々による大規模な査読を経てまとめられたものであり、以下のことを目的としている。

- 災害・健康危機管理研究の質の向上。
- 災害・健康危機管理研究から得たエビデンスで裏付けられた政策 (policy)、実務 (practice)、ガイダンスの質の向上。
- 若手研究者、ベテラン研究者、研究系教員を含む、研究者および学术界の研究力の向上。
- よりよい災害・健康危機管理に向けた、学术界、政策立案者、実務者、ステークホルダー間の連携 (collaboration) および参画 (engagement) 強化。

本書は独自性のある各章で構成されており、災害と健康問題を重視しながら、幅広い研究の計画、実践、報告方法に関する分かりやすい実践的ガイダンスを提供し、さまざまな環境下での量的 (quantitative)・質的 (qualitative) 疑問に答えるものとなっている。

る。また、災害・健康危機管理に直接関連する実際の研究事例を取り上げ、その手法と影響についても紹介している。

### 1.1.2 本ガイドンスの内容

災害・健康危機管理に関するWHOグローバルリサーチネットワーク (Health EDRM RN) の活動が発端となった本書は、毎年災害による健康被害を受けている世界中の何百万という人々へのリスクと影響を軽減するという、ステークホルダー間共通の目標を受けて作成された。

本書の内容は、WHO 災害・健康危機管理枠組、並びに、Health EDRM RN の目標 (1.2 章参照) で挙げられているように、研究や研究コミュニティの強化の必要性が明らかになったことから生まれたものである。Health EDRM RN における協議を経て、災害・健康危機管理に関する研究の委託者と実施者、政策立案と実践において研究・エビデンスを活用する幅広い意志決定者、実務者、コミュニティ関係者に対して、質の高い研究手法を提示する必要があることが確認された。本書の内容は、災害・健康危機管理枠組 (Health EDRM Framework)、仙台防災枠組 (Sendai Framework for Disaster Risk Reduction) 2015-2030、国際保健規則 (International Health Regulations, IHR 2005)、国連の持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals, SDGs)、並びに保健医療および他のセクターのグローバル (global)、地域ごと (regional)、国ごと (national) の関連する枠組に準拠し、その実践におけるエビデンスに基づく政策および実務の必要性を示している。

本書は研究に関する幅広いガイドンスを提供しており、災害や危機による健康リスクおよび影響 (consequences) の管理において適切なエビデンスを引き出すうえで必要な研究の種類を体系的に考察している。この研究には観察 (observational) 研究及び実証 (experimental) 研究のほか、質的データもしくは量的データ、またはその両方を用いる研究も含まれている。本書を利用する際には、各国の対応能力、健康に直接的・間接的に関連する影響など、危機や災害の健康リスクにおける固有の条件を念頭に置いて読むことが推奨される。

それぞれの章は、研究、実務、政策策定など幅広い分野における実務経験や専門知識を有する世界各国の多彩な著者 100 人以上によって執筆されたものであり、著者と同様に幅広く深い知識を持った専門家の査読を受けている。各章で、一つの章内ではカバーしきれなかった内容の関連、参考文献および情報源も紹介している。

### 1.1.3 本書の構成について

本書は次の 7 つのセクションで構成されている。

1. 序論
2. 課題の同定と把握
3. 研究スコープの決定
4. 研究デザイン
5. 研究プロセスと研究成果を論証する特別テーマ
6. 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19)
7. 研究者の手引き

# 1.1

本書ではまず、災害・健康危機管理の枠組みと研究の役割の概要を取り上げて状況を説明し（1.2 章）、日本の事例研究 (case study) を通して災害・危機がこれまで公衆衛生に及ぼしてきた影響 (impact) および災害・健康危機管理政策の策定に至る道のりを振り返っている（1.3 章）。

第 2 章、3 章、4 章では研究プロセスにおける主な 3 つの項目として、(i) 研究対象とすべき課題の同定と把握、(ii) リサーチクエスションの決定およびスコーピングレビューの構築、(iii) 研究本体の設計および実施を取り上げる。

まず、災害・健康危機管理の研究対象とすべき課題の同定と把握における第一歩は、背景にある疫学 (underlying epidemiology) の調査である。2.1 章では、災害・危機が死亡や外傷、その他の健康上の問題などの健康に及ぼす影響について説明している。2.2 章では、災害・危機が健康に及ぼす影響の測定についてさらに掘り下げて論じている。2.3 章は、一般的な疾病負荷の評価方法について考察し、2.4 章は、災害疫学の研究に関連するさまざまなデータベースやレジストリについて取り上げている。2.5 章は、特定のハイリスクグループにおけるデータの同定と取得に関する課題を取り上げ、第 2 章の最後（2.6 章）では、既存の関連研究の同定、評価、統合のためのシステマティックレビューの活用の仕方について説明している。

第 2 章で研究を必要とする課題の同定と把握について十分に把握できたところで、第 3 章では、研究計画の立て方について解説していく。研究計画には、研究に利用できるリソースの特定や、その影響を測定するためのアセットマッピング（3.1 章）、リスク因子の同定（3.2 章）、介入研究のデザイン（3.3 章）が含まれる場合がある。研究の実施に伴う倫理的配慮 (ethical implications) を考慮することも重要である（3.4 章）。続いてリサーチクエスションを決定し（3.5 章）、必要であればスコーピングレビューを実施して（3.6 章）、既存の災害関連の研究から収集できる情報を活用する（3.7 章）が必要になる。

リサーチクエスションが明確になったら、それに対する回答を導き出す為の適切な研究デザインを選択しなくてはならない。4.1 章は、その重要性について考察し、利用できる研究デザインをいくつか取り上げながら、特にさまざまな介入、活動、戦略の効果を比較評価するランダム化比較試験 (randomised trials) の活用に焦点を当てる。4.2 章では、こうした研究の多くで利用される可能性の高い統計学について説明する。その他、個々のランダム化が実施できない場合に用いる研究デザインおよび統計に関連する難しい課題については、4.3 章（クラスターランダム化比較試験 cluster randomised trials）、4.4 章（良質なデータの収集と管理）、4.5 章（発展的統計手法 advanced statistical methods）で取り上げている。モデル化手法 (modelling techniques) の活用については、4.6 章および 4.7 章で詳しく説明しており、4.7 章は経済評価 (economic evaluations) に着目している。4.8 章は、本領域の研究への地理情報システム (GIS) の活用について、4.9 章では、リアルタイム症候群サーベイランスシステム (real-time syndromic surveillance system) について説明を行っている。あらゆる研究計画では、研究活動から結果まで (actions to outcomes) の道筋を理解し（4.10 章）、研究結果の共有 (communication) および社会実装 (implementation) に関する計画（4.11 章）が必要になる場合がある。研究内容によっては、最適な手法が質的研究 (qualitative study)、もしくは、質的手法と量的手法の両方を必要とする混合研究 (mixed study) であることも考えられる。これについてはそれぞれ 4.12 章と 4.13 章で取り上げている。4.14 章は、自然に生じたさまざまな状況変化を分析する自然実験 (natural experiments) の手法を紹介している。第 4 章の最後（4.15 章）では、研究の観察 (monitoring) と評価 (evaluation) の方法を取り上げている。

第5章は特別テーマとして、災害メンタルヘルス研究(5.1章)、クラウドソーシングを用いたデータ収集(5.2章)、難民(refugees)および国内避難民(internally displaced population)に関する研究(5.3章)、先住民族(indigenous people)に関する研究(5.4章)を取り上げている。

第6章は、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)または今後起こり得るパンデミックが研究プロジェクトの実施に影響を及ぼす中、災害・健康危機管理研究をいかに計画、実施、報告するかについて、知識や情報を求める声が高まっていることを受けて2022年の改訂版で追加された。6.1章では、COVID-19やその他の発生し得る流行病の感染拡大の状況において、本ガイダンスで取り上げた災害・健康危機管理研究の手法をいかに適用するかについて説明する。

第7章は、災害・健康危機管理に関連する研究の実施における重要な実務的項目について説明するもので、最初に研究者として成功するための段階的アドバイスを紹介している(7.1章)。7.2章は、研究者を目指す、または新規研究をデザインするうえで役立つと考えられる既存文献の検索方法について言及している。7.3章および7.4章は、グラント申請(application for funding)の作成、および、倫理審査による承認(ethical approval)取得において考慮すべき重要事項について説明するもので、7.5章は、フィールド研究の実施の際に直面する特定の課題に焦点を当てている。7.6章は、研究報告(論文)の作成から出版に関するガイダンスを提供している。

そして最終章である7.7章では、本書の締めくくりとして、これまで実施されてきた災害・健康危機管理の研究の種類について、さらに数例を挙げて説明している。

#### 1.1.4 キーメッセージ

災害・健康危機管理において十分な情報に基づいた意志決定を行うにはエビデンスが不可欠である。エビデンスの提供元である研究は、質が高く目的に沿ったものでなくてはならない。本書は、研究者、将来の研究者、政策立案者、実務者に以下を実現するためのガイダンスを提供することを目的としている。

- 災害・健康危機管理研究の質向上
- 災害・健康危機管理研究から得たエビデンスで裏付けられた政策、実務、ガイダンスの質向上
- 若手研究者、ベテラン研究者、研究系教員を含む、研究者および研究コミュニティの研究力向上
- 災害・健康危機管理強化に向けた、研究コミュニティ、政策立案者、実務者、ステークホルダー間の連携および関係強化